

令和7年度 県立水戸第一高等学校自己評価表

目指す学校像	○真理を愛する学問第一の校風の下、質が高く、活気ある授業や課題研究、社会と連携した教育プログラムを展開し、生徒が切問近思の姿勢で学ぶ学校 ○自主自立の精神を重視する自由な校風の下、生徒が何ごとにも主体的に取り組むとともに、中高・学年の枠を超えて切磋琢磨する学校 ○至誠一貫・堅忍力行の校是の下、豊かな人間性や最後までやり抜く力を育むとともに、高い目標に挑む生徒をしっかりと支援する学校			
三つの方針		具体的目標		
「三つの方針」 (スクール・ポリシー)	「育成を目指す資質・能力に関する方針」 (グラデュエーション・ポリシー)	社会の変化に対応するだけでなく社会に変革をもたらす、グローバルな視点をもって茨城から世界に羽ばたく、高い志をもって地域医療をはじめ地域課題の解決を先導する、といった形で社会に貢献できる者を育成する		
	「教育課程の編成及び実施に関する方針」 (カリキュラム・ポリシー)	難関大学や医学部医学科、海外大学への進学希望にも十分応える質の高い授業と学習支援・進路支援を展開するとともに、生徒が主体的に取り組む特別活動等を重視する		
	「入学者の受入れに関する方針」 (アドミッション・ポリシー)	○真理を愛する学問第一の校風を理解し、好奇心旺盛で、自ら定めた課題を深く探究しようという切問近思の姿勢のある生徒 ○自主自立の精神を重視する自由な校風を理解し、何ごとにも主体的に取り組み、多様な者と協働しようという意欲のある生徒 ○至誠一貫・堅忍力行の校是を理解し、人格を磨き、高い目標に向けて最後までやり抜こうとする気概のある生徒		
昨年度の成果と課題		重点項目	重点目標	達成状況
【成果】 令和6年度(2024年度)の重点項目に関する7の重点目標の達成状況は、Aが6、Bが1、Cが0であり、十分目標を達成できたといえる。次年度についても、各項目の検証を重ね目標達成を実現していく。 進学状況については、卒業学年の学級数が6に減る中、国公立大現役合格者は100名を超え、国公立大医学部・医学科への現役合格者は過去最多(14名)、難関私立大合格者も令和以降2番目の数となった。個別大学で見れば、東京大への現役合格者が3名と、平成31年度以来の数にとどまったものの、東京科学大(旧東工大・東京医科歯科大学)、一橋大、大阪大への現役合格者は令和以降最多となり、東京藝大への現役合格者も2年連続で出た。さらに、早稲田大・慶應義塾大に44名(うち医学部1名)が現役合格した。これらは、生徒の多様な進路希望に丁寧に応えた結果と考えている。特別活動については、学校行事において、生徒が主体となる実行委員会を組織し、生徒の自主的な運営のもと、活発に行われており、満足度も高い。部活動については、生徒数が減少する中、体育部16団体、文化部16団体、同好会3団体が引き続き活動しており、加入率も9割を超えている。		教育課程・学習支援の改善・充実	①新課程での大学入試への対応を進めるとともに、中高連携・教科横断で授業改善を図り、生徒の授業満足度90%以上を目指す。	A
			②DXハイスクールへの採択を踏まえ、教育・学習活動等におけるICTの有効活用を進める。	B
			③科学オリンピックをはじめ、他校生等と切磋琢磨する「他流試合」への参加を奨励し、活躍を支援する。	A
		進路支援の改善・充実	④難関大学や医学部医学科をはじめ、生徒及び既卒生の第一志望実現を支援する。	A
		中高・学年の枠を超えた活動の推進	⑤+4学年活動など、附属中との中高連携での活動や特別活動の改善・充実を図るとともに、部活動改革を推進する。	A
		健康・安全の確保と法令遵守の徹底	⑥最後までやり抜く力の育成や教育相談の充実を図るなど、生徒の心身の健康・安全を確保する。	A
			⑦業務改善を進め、職員の心身の健康・安全を確保するとともに、法令遵守を徹底し、違反件数ゼロを目指す。	C
【課題】 ①授業改善を推進し、大学進学以降も見据えた本物の学力を生徒に身につけさせるとともに、大学入学共通テスト、個別入試に的確に対応すること。 ②生徒の多様な希望進路を叶えるため、学部・大学選択等に資する情報提供や文理・融合講座、GRITセミナー、進路講演会等の行事の充実、医学コース等の強化を図ること。 ③生徒が学校行事や部・委員会活動と学習を両立し、3年間を見通して計画的に進路支援を行うとともに、知道同南会(第4学年)の取組等により、第一志望を貫く既卒生を継続的に支援していくこと。				

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	A ○生徒の活動の形態や主体性を育む指導について更に研究する。 ○生徒の集中力が高まる時間が増えるように、授業内での構成や内容を工夫していく。 ○場面・目的に適したICT機器の活用法を研究していく。 ○研修の方法・内容についてより検討していく。
	充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A	
		○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	
国語	国語の学習に対する意欲・関心を高める。	○授業方法を工夫改善し、教員相互に授業を公開するなど、教科内における研修等を行い、指導方法に対する研究を深める。 ○指導内容・方法・進度について、各学年の担当者間で綿密に連絡する。 ○中高の連携を強化し、交流を通して相互の学びの意欲を高める。	A	A ○同学年担当のみならず異なる学年間、校種を超えた相互の授業観察、意見交換などを活発にし、次年度以降を見据えたよりよい授業計画の作成に努めていく。 ○小テストや単元テスト等のあり方について、実施状況や結果の分析を行い、情報交換を密にして研究を深める。 ○今年度の結果を分析して情報共有を図り、よりよい時期に適切な支援ができるよう努めていく。 ○ICT機器の使い方としてより適切な場面、内容を探していく。 ○考査実施後の結果の分析だけでなく、事前の指導、伝え方との関係性も意識しながら範囲、内容について考えていく。 ○与えた課題に対しての生徒の取り組み状況を把握し、生徒が自主的に学べるような支援のあり方を考えていく。 ○読書意欲喚起のための授業内の取り組みについて研究を深める。
	基礎学力の定着を図り、段階的に難関大学入学試験に対応できる学力の養成を図る。	○小テスト等によって基礎学力の定着を図る。 ○新学習指導要領・大学入学共通テストに対応するための学習指導の在り方について研究を深める。 ○個別の添削指導を実施するなど、難関大学入試に対応できる文章読解力・表現力の養成を図る。 ○副教材・ICT機器を利用するなどによって、学習内容の深化を図る。 ○定期考査等、基本・発展を取り混ぜた設問構成を工夫し、平均点50～60点台の問題を実施する。	A	
	自立的な学習を促し、豊かな言語能力を持った生徒を育成する。	○生徒の実態に即した課題の提示などにより生徒が自主的に学ぶ姿勢を育み、自立的学習の習慣を獲得させる。 ○読書意欲や創作意欲を喚起し、各種コンクールへの取り組みを奨励する。	B	
各科共通	グローバル化する国際社会にあって社会的な見方・考え方や地理・歴史認識を養い、現代の諸課題に広い視野に立って取り組む生徒の学習を支援する。	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら学習を支援する。 ○授業の取扱い教材に多様性をもたせ、さまざまな観点や資料から考察力を高められるよう支援する。	A	A ○教科・科目では、学問・研究分野の成果や手法などに触れた。引き続き生徒の知的好奇心に訴えられるような授業を展開する。 ○生徒同士の話し合いをさせたりする活動もとり入れた。これらを次年度以降も継続して生徒の学習意欲を喚起する授業を進める。 ○2年目となる新課程の共通テストの傾向について研究し、年間計画や授業展開についての検討に生かす。 ○電子黒板に加え、タブレットの有効な活用場面について継続して検討していく。 ○教科内での授業参観や、教員向けの校内研修の機会を活用して指導方法の向上に努める。
	充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A	
		○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	
地歴公民	綿密な教材研究や授業改善を図るとともに、大学入試問題の研究を継続的に行い、進路実現のための確かな学力を養成する。	○教員相互間での研修により専門性を高め、生徒の知的好奇心を喚起する授業の実施を目指す。 ○基礎・基本の習得を大切にしながら、自ら思考する能力、資料を分析する能力、課題に取り組んでいく姿勢等が身につけられるよう支援する。 ○国公立大学個別試験、難関私立大学試験、共通テスト等の分析にもとづいた、定期考査や校内模試等の作問と事後復習を意識し、生徒の学習活動において学力養成のための好循環が組み込まれるよう支援する。	A	B ○生徒の添削指導法なども教員間で共有し、より質の高い授業や個別指導を実施していく。 ○より高度な内容を学びたい生徒から、基礎・基本の振り返りの学習を必要とする生徒まで、多様な生徒の学習ニーズに応えられるような授業づくり・教材づくりに配慮する。 ○新課程の共通テストを中心としながら、入試動向の分析や研究に努め、教員間で情報の共有をはかり、生徒の力を伸ばしていく。 ○教員間でも研鑽を積み、より質の高い授業が展開できるように改善を継続する。 ○DXの展開にあわせ、ICT機器使用やソフトウェア、採点ソフト等の活用法を研究する。
	教科研修の充実によって、教員の授業力の向上をはかるとともに、新学習指導要領、中高一貫教育、評価方法の研究を進める。	○科目担当者間での授業の進度、指導方法など綿密な打合せを行い、課題意識を共有し、指導を充実させる。 ○ICT機器やソフトウェアの活用方法に対する研究を継続的に実施していく。 ○新学習指導要領、中高一貫教育に対する研究を継続的に実施していく。 ○生徒の学習活動・能力を的確に評価する方法の研究を実施していく。	B	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
数学	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	A ○個々に応じた確かな学力像を生徒自らが持てるように働きかける。 ○経験豊かな教員の数学教育の知見を吸収し、次世代に残していく。デジタル化して残せると良い。 ○適切な分野やタイミングを見極めてICTを活用し、より教育効果を高めていきたい。 ○教育課程変更後の入試に対応できる力を生徒が身につけられるように、授業の進度や指導内容の情報を共有する。
		充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	A	
		○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	
	授業に積極的に取り組ませるとともに、自主的に数学に取り組む態度を育成する。	○低学年では予習復習を励行させ、教科書内容を定着させ、入試に必要な基礎力の定着を図る。 ○学年の進行とともに課題の在り方を検討し、低学年では課題等の提出を習慣化させ、高学年では自主的学習に移行できるように促す。 ○学年担当者間の連携を密にし、教材の精選と授業内容の充実に努めるとともに、多様な見方・考え方を例示するなどして、数学に対する生徒の興味・関心を高める。 ○電子黒板などICT機器の実践事例やノウハウを蓄積し、職員間で共有し実践することで生徒の授業理解の深化を図る。	B	B ○教育課程の変更に伴う学習内容増加により、授業進度や教授内容についてより深く検討する必要がある。教材の精選やICT機器の活用などを積極的に行い、新課程に対応できる力を教員・生徒ともに身につけていかなければならない。
進路実現のための学力向上を図る。	○考査・試験・課題の問題は学年全体で精選検討を重ねるとともに、結果についても分析を行い、継続的な指導に活かす。 ○大学入試問題等を日頃から研究し、積極的に授業に取り入れ、大学個別入試および共通テストに対応できる力をつけさせる。 ○大学入試問題分析会(有名難関大学)を実施し、入試問題研究や教材研究により教員のレベルアップを図る。	B	B ○外部講師を招いての進路講演会に積極的に参加して入試情報を収集し、教員間で共有していきたい。生徒に対しては、入試結果・入試問題の分析等を踏まえ実力試験・定期考査・章末テストの問題を精選し、学習効率向上を狙って還元していく。	
理科	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	B ○生徒の主体性を高めるような指導法・教材・教具の工夫をしてきた。ゴールのある課題ではないので、次年度も生徒の様子を観察しながら教科内で議論を重ねるなどして、より一層努力していきたい。 ○次年度も、ICT機器を効率的に活用し、授業の効率化と充実に図っていききたい。また、ICT機器の使用が目的とならないように、その効果も十分に検討していきたい。 ○次年度も、教科内で授業観察を行うなどして、指導方法について活発な意見交換をしていきたい。また、高教研の活動に参加し他校の先生方の授業参観をするなど、自己研鑽に励みたい。
		充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	B	
		○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○より教育効果の高くなるようなICT機器(タブレット及び電子黒板)の活用法を模索し、学習指導の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	
	知的な好奇心を育て、科学的な思考力・判断力・表現力が身につくよう、教員の授業力の向上を図り、授業展開を工夫する。	○自然科学の様々な事象現象について深く考察し、科学的な思考力・判断力・表現力を身に付けられるように、観察・実験において主体的・対話的な学びの授業展開を工夫し、実践する。 ○重要な図やデータの考察・理解にデジタル教材を活用し、知識の習得と整理がしやすくなるようにする。 ○最先端の科学技術について、授業内で適宜話題に出し、生徒が自ら探究したくなるように興味・関心を引き出す。	A	A ○引き続き、生徒が科学的な思考力・判断力・表現力が身につけられるように、演示実験や生徒実験をより多く取り入れた授業を行っていききたい。また、普段の授業においても対話的な学習の場を設けるなど、生徒が主体的に取り組める工夫を凝らしていきたい。 ○最先端の科学技術についての知識を正しくわかりやすく伝えられるように、知識の獲得のみならず、表現にも工夫を凝らして伝えていきたい。
確かな学力の定着を図ると共に、生徒それぞれの進路希望に応じた入試に対応できる学力の養成を図る。	○観察・実験を通して基本的な原理・法則の理解を深め、さらに問題演習を重ね学力の定着を図る。また、そのための演習量を確保する。また、校内試験ごとと解答の見直しをさせ、基礎学力および応用力の向上を図る。 ○国公立大学個別試験、難関私立大学入学試験および大学入学共通テストの分析を行い、担当教員間での報告・連絡・相談を密に行い、授業や定期考査等に反映させることで学力の向上を図る。	B	B ○定期考査では、基礎・基本の定着を図り、実力試験や校内模試では、難易度の高い問題を出題し、応用力を身につけさせることができた。今後、大学入試の動向を踏まえ、共通テストや二次試験の詳細な分析を各教科で行い、高い学力の育成に努めていきたい。	
新学習指導要領や大学入学共通テストに向け、研修の確保・充実に努め、教員の授業力向上・これからの時代に求められる教育のよりよい在り方に対する意識の向上を図る。	○新学習指導要領・大学入学共通テストに対応するための学習指導の在り方や校内模試の在り方など、これからの本校の理科教育の在り方について検討を進めていく。 ○主体的な学びや対話的な学びの過程で、ICTを効果的に活用する。 ○ICTの活用の際には、教員間での教材の共有化を図るなど研修の機会を設け、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B	B ○今後も教科内で意見交換をしながら、より良い学習指導法や観点別評価の仕方について検討し、改善をしていきたい。 ○ICTの活用方法に関しても、研究授業などを通して活用方法を研究し、より効果的な活用方法を検討していきたい。	
各種科学オリンピックにおける生徒の上位入賞を図る。	○各種科学オリンピックへの参加生徒を募り、上位入賞が実現できるよう指導の機会を設ける。	B	B ○各種科学オリンピック・コンテストに挑戦する生徒の数を増やすとともに、全国大会出場、上位入賞の実現に向け、より良い指導法を構築していきたい。	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	A ○大枠の指示のほかは生徒による授業進行(チーム編成、ゲーム補助、ゲーム間の生徒間の声掛け等)を多くとり入れており、指示も生徒間で行われる場面を作ることで主体性を持った授業への取り組みが実現できている。 ○ICT、振り返りのプリント等を活用することで効果的で振り返りがしやすい授業づくりに努めている。 ○担当教員間での情報共有を密にし指導内容の精選が都度行われている。
	充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	A	
			A	
保健体育	歩く会の高い完歩率を維持させる。	○集団行動における規律とその態度の重要性を理解する。 ○けが防止のため、体力・筋力・精神力の向上が図れるよう授業に取り組む。完歩への意欲を喚起する。	A	A ○運動種目によらず年間を通して集団行動の実践と意識付けを行っており、規律等重要性について理解を深めている。 ○運動量の確保を念頭に授業展開しているため、運動への意欲と同時に筋力増強にも良い影響を与えている。今年度は県の体力づくり優秀校にも選ばれ目に見える形での評価となった。 ○熱心さと運動技術の拙さなどがけがにつながることで度々あった。事前の注意、運動中の声掛け・事故発生時の対処など科内での徹底を図りたい。 ○高校生年代の健康課題、または自身の将来や地域から世界規模の環境問題についての取扱いを熱心に取り組む様子を確認できた。実践につながるようによりその意義に訴えかけるように心がけた授業づくりに努めたい。
	体力テストの底上げを図る。	○本校生は傾向として筋力全般が弱いため、体育授業で毎時筋力補強運動を実践する。 ○長距離走への積極的な取り組みにより、基礎体力及び全身持久力の向上を図る。 ○体力テストにおける本校生の弱い部分(投力)の強化向上を図る。 ○特別活動の体育分野における積極的活動を推進する。	A	
	授業時のケガ等の防止に努める。	○運動の基本動作において、基本となる正しい動き方を身に付けることがスキルの向上のみならずケガの防止に繋がることを理解、実践する。 ○用器具の取り扱い及び使用について安全第一を心がけ指導する。 ○授業に臨むに当たり、健康観察、感染症対策、熱中症対策、交通安全・交通事故防止に努めると同時に、生徒にも健康安全に対する意識の向上を図る。	B	
	「保健」とおとして心身の健康の保持増進を図る。	○「保健」を通して、現代の健康問題や新しい時代の健康の考え方などについて理解させる。 ○「保健」の授業を通し、思春期から中高年期までに出あうさまざまな健康問題について学ぶとともに、労働や健康との関係や、働く人々の健康が保持増進されるしくみ、私たち一人ひとりが環境づくりに積極的に参加する意義やその方法について理解させる。 ○ICT機器の積極的活用を図り、生徒の興味関心を高め、生徒の情報活用能力を養う。	A	
各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	A ○芸術専門の進路を選択する生徒は少ないが、豊かな感性を育み、各生徒が生涯を通じて芸術に関心を持てるような指導をしていきたい。 ○科目や題材の特性に合わせてICT活用の方法を検討し、改善を図る。 ○実技指導に際しては個々の能力の差や表現方法の違いも生じるため、生徒ひとりひとりに合ったICT機器の利用法を模索したい。 ○教科内の情報共有を図り、相互授業参観をより積極的に行う。
	充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を検討、改善を図り、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るため、相互授業参観等の研修を実施する。	A	
			B	
芸術	鑑賞の機会を確保するよう努める。感性を高め、人生を豊かにするという意識・態度を育てる。	○授業の中や校内での鑑賞活動により、多くの作品に接する機会を増やし、実物・実演による芸術作品が持つ魅力を体感させ、豊かな感受性と人間性を身につけさせる。 ○様々な分野、多様な表現手段の作品を取り上げ、それを鑑賞する事により、芸術に対する視野を広めるとともに、ものを見つめる目を養い、個性を活かした芸術活動を目指させる。	A	A ○校外学習による芸術鑑賞会の実施を継続し、生徒が本物の芸術に触れる機会を増やしたい。○多様なジャンルの作品を取り上げ、鑑賞活動を通して広い視点で芸術を捉える力を育み、生徒の個性を大切にしながらその感性を高め芸術を重んじる精神を養いたい。 ○生徒ひとりひとりがその個性を活かしながら自発的に学びを深め、活動する場を増やしていきたい。 ○個々の活動に加えグループ活動の機会を増やし、作品や表現について他者と思いを共有したり、互いに理解を深め合えるようにしたい。
	自発的に、課題に取り組む姿勢を持たせる。	○実技・実習の時間をできる限り確保するとともに、その内容を精選し、工夫して実践できるようにする。基礎を大切にしつつ、応用までバランスの取れた授業内容を目指す。 ○生徒が主体的に取り組む学習活動を取り入れ、より活性化した授業展開を目指す。 ○個々の表現やグループでの表現を発表する機会を増やし、それを生徒同士で共有し、理解し合う場面を多く設ける。	B	
	新たな教材研究に努める。	○多様化している趣向に対応するための教材研究に努めるとともに、教師自身が技術向上の研鑽を積み、高いレベルでの指導ができるよう努める。	A	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	B ○授業アンケートの結果を指導に反映させ、さらなる改善を図る。 ○文法力およびコミュニケーション力の双方においてさらなる定着を期し、指導と評価の一体化や観点別評価、ICTを活用した授業について、教員間での連携を密にする。 ○教員間での情報交換や相互授業参観を積極的に行う。
	充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果をもとめ、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実を努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実を努める。	B	
		○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B	
外国語	4技能5領域の統合的な言語活動を通して、総合的な英語力の伸長を図り、基礎的なレベルから大学入試に対応できるまでの実践的コミュニケーション能力を育成する。	○英語コミュニケーションでは、受容技能と発信技能のバランスのとれた指導を行い、英文を正しく理解したり、自分の意見や考えを表現したりする能力を養成する。 ○論理・表現では、目的・場面・状況を意識しながら表現を学び、自己表現活動でそれを活用することや添削指導を通して、適切に自己表現するための知識・技能や表現力を育成する。 ○家庭学習では、サイドリーダーや総合問題集等を授業の内容や評価と有機的に関連づけることにより、自律した英語学習者としての態度を涵養すると同時に、英語力のさらなる伸長を図る。 ○観点別評価において、評価の場面と評価の対象を生徒と共有すること、各試験の問題の改良を図ること、実技試験で即興性のあるやり取りの評価を行うことを通して、信頼性と妥当性のある評価を行い、指導と評価の改善を目指す。 ○外部検定試験における各学年目標 1学年:CEFR A2(実用英語技能検定準2級相当)の生徒100%(243名)、CEFR B1(同2級相当)の生徒70%(約170名)を目指す。 2学年:CEFR B1(実用英語技能検定2級相当)、CEFR B2(同準1級相当)の生徒がさらに増えるように、普段の授業の中で対策をする。 3学年:CEFR B2(英検準1級相当)の生徒20%(約45名)、CEFR B1(同2級相当)の生徒100%(236名)を目指す。	B	B ○英語コミュニケーションでは、教科書の内容理解だけでなく、様々なアウトプット活動も盛り込みながら受容技能・発信技能双方をバランスよく育成することを図った。 ○論理・表現では、ネイティブスピーカーによる補助的指導も取り入れながら、表現のインプットとアウトプットを実践的に体得できるように指導を心がけた。 ○家庭学習に関して、各授業において自主学習課題に関連する内容を適切に設定し、自律した学習者としての姿勢・意識の定着を図った。 ○観点別評価に関して、定期考査やパフォーマンステストといった各種試験を通じ、学習の動機づけに資するような指導と評価の一体化を図った。 ○外部検定試験目標については、各学年ともおおむね達成できたと考えられる。 ○次年度に向けて、基礎力の定着から大学入試に適應できる応用力の獲得までよりシームレスにつなぐ指導を目指し、各学年間の連携をさらに密にしていこうとする。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
家庭	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	A
	充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	A	
	基礎・基本の内容を体験を通して理解させ、問題を見つけ、よりよい生活に変えていこうとする態度と生きる力を育てる。	○実験・実習内容の工夫と精選をし、知識と体験の定着を図る。 ○社会の各分野における変化や問題を自分事として捉えられるように、高校卒業後の自分の人生に反映していこうとする態度が身につく授業の展開を図り、自ら学び自ら考える力を育てる。	A	B
	各分野の関連性・重要性を見だし、日常生活と比較させることで、主体的・総合的に生きようとする意識・態度を育てる。	○夏休みに各家庭で実施するホームプロジェクトでは、4月からの授業の中で全員が計画的に進めていけるように支援し、日常生活の中の問題点・改善点を認識させ、生活の質の向上に結びつくように工夫する。	B	
情報	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	B
	充実した授業を展開し、生徒の授業満足度を高め各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図る研鑽を積む。	A	
	学習活動を通じて、情報モラルに対する知識・理解を深め、状況に応じた適切な行動ができるようにする。	○授業等において多様な手段(動画視聴や事例検討)を用いて、一般社会での事例を生徒が「自分事」として捉えられるようにさせ、情報モラルが着実に定着するよう指導する。	B	
	教科に関する最新の情報収集に努めるとともに、生徒がそれぞれの希望進路に応じた学力を身に付けられるよう指導する。	○共通テストに関する最新の情報を収集し、生徒が実力を十分に発揮できるよう支援する。 ○情報科関連の授業がない「空白の1年」にある2学年生徒に対し、次年度へ向けた効果的な学習支援を前倒しで実施する。 ○共通テストや各種模擬試験・問題集の分析をおこない、授業等を通じて生徒に還元する。 ○新学習指導要領のねらいに基づき、授業の中で生徒が主体的、対話的で深い学びができるようなワーク(作業)を取り入れる等工夫をおこなう。 ○クラウドの活用や、オンライン教材を用いて、生徒がその習熟度に応じた学習ができるようにする。	B	
	生徒が情報科で学んだことを、日常生活の中で積極的に生かし、情報社会に主体的に参画できるようにする。	○生徒が情報科の学びで身に付けたことを、他教科や特別活動において効果的に活用できるよう支援する。	B	○情報モラルについては、重要な内容なので引き続き内容の充実に努めていきたい。 ○授業の中で、共通テストなど出題された問題について触れたり、演習の時間を増やすなど指導を工夫していきたい。 ○2年生については、前期の実力テスト実施、オンライン教材の活用、3年0学期を意識させるための学習教材の配付などをおこなう。生徒によって意識の差が感じられるので、さらに働きかけを工夫していきたい。 ○主体的、対話的で深い学びができるようなワーク(作業)を取り入れる等工夫をおこなっていきたい。また、指導法について研鑽を積んでいきたい。 ○情報科で学習したことが、少しずつ他教科や特別活動等で生かされている場面が増えてきた。他分野との連携を強めていきたい。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
教務	授業時間を確保する。	○自習をできるだけ避けるため、早めに出張・年休を把握し、可能な限り授業交換をする。その際、交換による授業の不均衡にも配慮する。さらに、授業の曜日変更により、定期考査間の授業時数の均一化をはかる。	B	<p>○授業時間確保に向けて時間割変更は交換が原則だが、交換できない場合が多かった。また、授業時数調整のため、定期考査を前後した交換は原則禁止としているが、急な予定変更等でやむなく交換となったことも多々あった。今一度この点について改善をはかりたい。</p> <p>○ICT活用については、教育改革部や授業改善推進チーム主導で行っており、教務として助力できたことは限られた。各部署と連携し、適切な業務分担としていきたい。</p> <p>○教育改革部と調整しながら、総合的な探究の時間に関する教育課程を検討することができた。次年度から年間の計画をより綿密にし、変更した教育課程がうまく機能するようにしていきたい。また、半期履修の数学Ⅱについては、今後も継続的に検証していきたい。</p> <p>○学校説明会、年間計画のホームページのこまめな更新、教育活動の写真を提供し、学校の教育活動の公開を十分に行うことができた。来年度は従来の学校説明会と別に、部活動体験日を設けることでよりよい広報活動を行っていく予定である。</p> <p>○指導要録や出欠入力は校務支援システムで一元管理できている。出席簿の記録も大切にしながら、欠課時数の多い生徒について早急に確認できるような体制を整えていきたい。</p> <p>○卒業式の時期が遅くなったことで、他の学校行事(入学予定者説明会など)や各学年への影響について、より綿密に連携していく必要がある。</p> <p>○時代の変化や本校を取り巻く教育環境の変化に伴い、総会や役員会を通して、これからの奨学会の本校教育への助成のあり方を協議していく必要がある。○総会後の3学年学年懇談会については、体育館での実施ではなく、各教室で一斉配信の方が、片付け等の混乱が避けられるかもしれない。</p> <p>○同窓会とは、連絡を密に取りながら協力を依頼し、各行事のいっそうの充実を図りたい。</p> <p>○ICTを利用した応募方法に変わってきており、その周知については説明会で十分に行っていきたい。</p>
	授業内容のさらなる充実を図るとともに、ICTの活用を推進する。	○60分6時間の授業をより充実したものとするため、教材や生徒情報等が職員間で円滑に共有されるよう、校務支援システムや共有ドライブを整備する等の環境整備に努める。また、教育改革部と協力し、教員相互による授業研究やICTを活用した授業展開を推し進められるよう、学習環境を整える。	B	
	現行の教育課程の検討をする。	○学習指導要領に基づいて、単位制を活用した、より教育効果の高いカリキュラムの構築を目指すとともに、大学入試制度の変更を踏まえて教育課程の検討を行う。また、各教科・分掌と連絡を取りながら中高一貫教育校や医学コースの教育活動に沿った教育課程を検討する。	A	
	教育活動を公表する。	○学校説明会委員会や教育改革部と連携して、中学生対象の水戸一高説明会の実施により、本校の教育活動を公開する。また、同時に、学校公開やホームページを通して、地域住民等に広く水戸一高の教育理念を周知する。	A	
	統合システムを円滑に運用する。	○校務支援システムの円滑な運用を進めるために、随時、管理体制の見直しや、活用法の研究に努める。また、システムの効率的運用で教員の授業研究時間の増加を見込む。	B	
	学校行事を各分掌、該当学年と連携して円滑に実施する。	○入学式・卒業式を、関係する学年や各分掌と連携・協力して円滑に実施する。 ○各行事の企画・運営にICTを効果的に活用し、円滑に業務を進める。	B	
	奨学会関係の事業を、各分掌や各学年と連携して円滑に進める。また、同窓会との関係を深め、諸事業に協力する。	○奨学会との連携・連絡を適切に行い、奨学会総会並びに奨学会役員会の企画・運営を、各分掌や各学年と協力して円滑に進める。 ○保護者や学年への連絡・報告を適切に行い、様々な学校行事が円滑に進められるように内容を工夫・改善する。 ○同窓会との連携・連絡を適切に行い、諸事業に協力する。 ○高等学校PTA連合会関連行事を用いて、本校教育活動の発信に努める。 ○学校内外の状況変化に対応した各行事の企画・運営について研究を進める。	B	
	奨学金関係事務を適正に実施する。	○奨学金関係の事務および奨学生の選考に関する事項等を、ICTも活用しながら適切に行う。	A	
特別活動	学校行事を通じて、本校生としての一体感と誇りを持たせ、学校生活を充実させる。	○各委員会生徒と密接な連携を図り、綿密な活動計画のもとで各行事の運営を行う。 ○学校行事についても、天候その他のリスクに対応する綿密な計画を立案・運営ができるよう委員会生徒を支援する。また、各種委員会所属生徒の委員会活動と学習のバランスがとれるように適切な指導・支援を行う。 ○積極的な生徒会活動への参加を促し、主体的な運営ができるよう支援する。その活動の中で、適切な集団行動をリードする人材を育成する。 ○学校行事の満足度85%以上を目指す。	A	<p>○学校行事の満足度は86%を超えており、生徒は充実して取り組んでいると思う。ただ、各クラス4～5人の生徒があまり充実していると思わない、充実していると思わないと回答しており、検討委員会・実行委員会で解決を図っていきたい。</p> <p>○学校評価アンケートによると部活動と学習の両立をしていると回答した生徒は80%未満にとどまった。部・同好会代表者会議、顧問会議を通して解決を図っていきたい。</p> <p>○部活動のあり方を今年度も検討してきたが、結論は出せず、年度末を迎えてしまった。来年度は附属中学校の体験型部活動についてはあり方を見直し、現在の生徒のニーズに合ったかたちに変化させていきたい。</p> <p>○来年度も継続し、作成・活用を呼び掛けていく。</p>
	部活動を通じて、豊かな感性と健全な心身を育む。	○部活動と学習活動を両立している生徒の割合、80%以上を目指す。 ○各部活動で主体的な運営になるよう導き、リーダーとなる人材を育成する。 ○各団体の設備、備品の管理を徹底させる。 ○附属中学生の体験型部活動の一層の充実をはかり、中高連携した活発な部活動を展開、高校部活動のさらなる発展を目指す。 ○限られた時間の中で、最大の効果を得るために計画性をもった活動になるよう指導する。	B	
	HRにおいてキャリア・パスポートを活用する	○各学年のHRにおいてキャリア・パスポートを作成し、社会の中での自身の在り方を考える。	B	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
進路支援	生徒一人ひとりが高い進路目標を持つことを推奨し、一人でも多くの生徒が進路実現できるように支援する。難関大学(東北大、東京大、東京科学大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大)の一般選抜(前期日程まで)において35名以上、医学部医学科において15名以上の現役合格を目指す。	<ul style="list-style-type: none"> ○各学年と連携し、生徒の進路意識の高揚を図るとともに、授業を中心とした主体的かつ計画的な学習を促進させる。 ○生徒が大学のオープンキャンパス(WEB開催を含む)に明確な目的意識のもとで積極的に参加し、得たい情報を自らすすんで獲得しその活用がはかれるよう、学年との連携のもとで事前・事後の支援を強化するなど、その支援の仕方の工夫を努める。 ○東京大学をはじめとする難関大の研究を通じて、「難関大研究会」の機能をさらに強化し、学年間の情報共有に努め、進路希望の実現に結びつける。 ○大学入学共通テストに関して、学年や教科と連携し、定期考査等での出題の工夫をはじめとして新傾向の問題へ十全な対応を進める。 ○医学コース関連のプログラムを円滑に実施し、キャリア教育と学力増進の両面で医学科を志望する生徒への支援の充実を図る。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒の進路意識の高揚については、各学年団による積極的な生徒への働きかけが年間を通じて計画的に実施され、十分にその目標を達成できた。 ○オープンキャンパスについては、2学年を中心に丁寧な支援をしつつ、夏季休業中に多くの生徒が参加した。次年度については、さらに目的意識を持って取り組めるような支援の工夫が必要である。 ○予備校等から集めた難関大に関する各種の分析データを学年に提供し、学年では生徒の状況と照らしながら、各学年各々の問題意識を反映した形で、新たな取り組み(東京大学生徒の交流会、東北大学説明会)も交えて効果的に実施された。 ○大学入学共通テストについては、教科において対応が進んでおり、二次対策と共通テスト対策のバランスを重視した授業や定期考査を実施した。今後は共通テストは個別試験への1次試験という意味合いから、共通テスト後の添削指導等に力を入れた。 ○医学コースの事業については、予定通り効果的に行うことができ、各行事の検証もしっかりと行い職員間での共有ができた。次年度もより効果的かつ効率的な支援を工夫していきたい。
	学年と連携をし、生徒や保護者に講演会やガイダンスを通して、進路情報を提供する。	<ul style="list-style-type: none"> ○学年と連携し、文理・融合講座、進路講演会やガイダンスを通して、情報提供と生徒の啓発に努める。保護者に対しては、保護者対象の進路講演会や医学部進路講演会等も実施し進路情報の提供に努める。 ○生徒・保護者・教員の3者にとってより有益なものとなるよう「進学資料」、「進路の手引き」の改良に努める。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ○学年との連携のもとで効果的な時期に生徒対象の進路講演会を実施した。保護者対象の進路講演会(医学部進路講演会)も実施し、多くの保護者が参加し、変わりゆく入試制度のその方向性や現状について、最新の情報を提供することができた。今後も保護者が参加しやすいようにオンラインを活用するなどの工夫を行っていきたい。また、生徒と保護者が進路に関して話し合うきっかけを作っていきたい。 ○進学資料や進路の手引きにより、学校からの情報提供を適切に行うことができた。生徒が自分で進路決定するための効果的な資料になるように、今後も改良に努めたい。
	生徒のデータを3年間通して見渡せる進路情報システムの改良と、その活用への環境整備を進める。	<ul style="list-style-type: none"> ○3年間の学習成績と最終的な大学の合否がリンクした形でのデータベース「佐々木システム」について、今年度も新たにデータの更新を行い蓄積していく。 ○年間4回の職員研修を実施し、進路支援における有効活用をはかる。 ○現役時のみならず浪人した生徒(第4学年、知道図南会)も含めて、進路確定まで継続的な支援を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○今後は既存のデータを検証し、高校3年間の学習成績と進学先について「進学資料」に一本化していきたい。 ○年間4回の職員研修を実施して、本校での進路支援の方向性を共有できた。今後も有意義な研修を計画実施していきたい。 ○既卒生に対しても大学入試に関する情報提供を密に行い、推薦入試や一般入試において適切な支援を行うことができた。今後も個に応じた支援を心がけ、情報提供を密に行っていきたい。
教育改革	「チャレンジ・プロジェクト(+4学年活動等)」の充実を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○「心に火をつけるフォーラム」、「文理・融合講座」、「探究力向上セミナー」、「キャリア探究対話」、「GRITセミナー」、「東大探訪」等の行事を中高異なる学年とともに経験し、生徒自身の在り方や生き方、進路について考えを深める。 ○「知道プロジェクト発表会」をとおして課題発見力を高め、多視点からの論理的考察力や、他者への伝達力、研究態度を培う。「パブリックリーダースクール」等の行事により、将来において社会貢献のできる人間育成を目指す。 ○世界のイノベーションなどの中心となっている米国および台湾にそれぞれ生徒を派遣し、現地のトップレベルの大学や高校、最先端企業、文化施設などを訪問し、生徒・学生・社会人との交流などを行うことにより、多角的な国際感覚や英語力、主体的にチャレンジすることのできる胆力などを養成する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ○「心に火をつけるフォーラム」は、ソニー元社長の平井一夫氏を講師として招き、進路選択や生き方について考える良い機会となった。また、今年度が戦後80年という節目の年であることから、「パブリックリーダースクール」では平和をテーマに実施し、平和について深く学ぶ機会となり、とても有意義なものになった。 ○「+4学年」の異学年交流をさらに活発にしていきたい。
	教員の授業力向上を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○指導教諭及び中高合同の授業改善チームを中心に、授業改善を積極的に進める。 ○「校内授業公開」による校内での実践研修および、「筑波大学附属高校等の教育研究大会」、「駿台教育研究所の教育研究セミナー(含オンライン)」、「Find!アクティブラーナー(オンライン研修)」等による学習指導法研修を行い、質の高い授業を研究する。 ○「校内教員研修会」、「県外進学校視察」等を行い、難関大学進学指導やこれからの時代に求められる教育等に関する知識や技術を蓄積し、継承する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○指導教諭を配置するとともに、「校内授業公開」は年3回の重点期間を定め、年間を通して互いに学べる機会を設けた。ただ、授業公開を見学に行く教職員が少なく、次年度はより良い形を企画し、学校全体の授業力向上につなげたい。 ○構築した授業改善のサイトの更新を図っていく。
	開かれた学校づくりを推進する。	<ul style="list-style-type: none"> ○中高連携や、他中学・高校・高大連携を推進し、相互に連携・交流を深める。 ○「学校公開」を行い、本校の教育活動や取り組みを広く周知する。 ○「知道プロジェクト発表会」は、学識経験者等の第三者に見てもらい客観的立場から意見をいただく。他校教員や保護者来場・評価も検討する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ○「学校公開」では、ガイドツアー「水戸一の道」に加えて、江山閣での書道・美術展を開催し、地域の住民の方々を多数呼び込むことに成功した。「文理・融合講座」では、今年度も各分野の最前線で研究する多数の教授を招いて、実施することができた。 ○中高連携の充実が、今後の課題である。
	充実した教育活動により、未来を担う人間を育成する。	<ul style="list-style-type: none"> ○「総合的な探究の時間」をとおして進路意識と探究心を刺激し、将来を考えさせる。 ○学校の教育活動全般をとおして、道徳的判断力や実践意欲・態度を育成する。 ○『課題研究優秀論文集』等を作成し、当該生徒は年間の学習成果の確認、学校全体としては共有化、後年のための資料化などにより教育活動の充実資する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○「総合的な探究の時間」の年間計画や具体的な指導計画を見直し、学年任せになりがちであった方針や方法を整備しつつある。 ○本分掌で作成する報告書について、電子媒体化や発刊時期の柔軟化などが検討事項である。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
生徒支援	基本的な生活習慣の確立を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○挨拶の励行。日常生活の様々な場面で積極的に挨拶を行うようにする。 ○校外・地域等に貢献・奉仕しようとする意識を持たせ、主体的に行動できるようにする。 ○規範意識を高め、水戸一高生として誇りの持てる行動ができるようにする。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ○マナーアップキャンペーン等の活動も行き、自身や学校、地域への意識の寛容をはかり目標達成に努めた。
	学校生活の安全を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○思いやりのある豊かな人間性を養い、人間関係を円滑にし、水戸一高生としての自覚と責任ある行動が取れるようにする。 ○各学年・保健厚生部・養護教諭との連携を密に、アンケートなどを活用しながら、生徒の状況を正確に把握し、心身の安全を支援する。 ○スマートフォン依存症防止のために、スマートフォン等の適切な使用法を支援する。 ○インターネット上で個人やグループに対する誹謗中傷や、SNSでのいじめ、仲間はずれ、個人攻撃などが行われないようにする。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○アンケートや養護教諭・教育相談担当等各係においての生徒の関わり合いにおいて生徒に寄り添う活動に努めた。 ○配布物や呼びかけ、各係の活動によりスマートフォン、SNSとの付き合い方についての心構えなど意識付けを行うことができた。 ○近隣で犯罪も発生しており、複数での登下校を意識する等の自己防衛の確立が課題。
	交通安全の意識を向上させる。	<ul style="list-style-type: none"> ○自転車は車道の左側通行など、交通法規の遵守を徹底する。 ○自転車による交通事故0(ゼロ)を目指す。自転車を運転する際にはヘルメットを着用し、スマホやイヤホンを使用しながら運転をしないなど、安全な自転車の乗り方を徹底する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○マナーアップキャンペーン、自転車安全教室、呼びかけなどを通じてより意識的に交通マナーに向き合うことができるよう努めた。 ○自転車のヘルメット着用率をさらに高めることが課題。
	いじめ問題に適切に対応する。	<ul style="list-style-type: none"> ○いじめの未然防止に努め、いじめに組織的に対応する。 ○いじめを早期発見するために、各部署との連携を図り、職員全体で情報を共有する。 ○教職員対象に研修を実施するなど、いじめに対する意識を高める。 ○インターネットの適切な利用を指導することで、SNS上のいじめを防止する。 ○いじめ対策推進会議を毎月開催し、困難を抱える生徒情報の共有も図る。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○アンケートとその内容の担任・学年との共有によりいじめに対する向き合い方の意識付けを行うことができた。 ○担任・学年といじめ対策会議との連携によりいじめに組織的に対処した。
	学習環境の整備に努める。	<ul style="list-style-type: none"> ○清掃箇所をクラスや部活動等の団体に適切に分担し、校舎内外の美化に努める。教室のワックスがけも併せて行う。 ○基本的な感染対策は継続して行き、衛生環境が保たれるような取り組みを徹底する。 ○清掃用具やカーテンの劣化や衛生状態、適切な数量・道具がそろっていることの確認と交換・補充、モップ等、清掃用具の点検、交換、補充を行う。 ○教室等の空気・照度検査、飲料水の水質検査、ダニの検査等を実施する。 ○施設・設備の安全点検を行い、学習環境の安全の確保を図る。 ○相談室設置に伴い、部屋の整備・利用調整を行う。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ○各清掃箇所の担当者・生徒への案内が効果的に行われ、校舎内の衛生状態を保つことに資することができた。 ○係の呼びかけにより、校舎内の安全に対する意識を全職員と共有することができた。
	心身ともに健康的な生活習慣の確立に努める。	<ul style="list-style-type: none"> ○事故等の未然防止のために、担任や養護教諭等を中心とした保健指導を、適宜行う。 ○各学年、生徒支援部、スクールカウンセラー等と連携し、生徒の心身の健全な育成に努める。 ○健康に関する情報提供のための「保健だより」を、毎月1回発行する。 ○気象情報を収集し、気象変化に応じた行動・対策が速やかにできるようにする。 ○災害時における避難訓練を防災に対する意識を高めるよう指導する。また、休日や校外においても緊急事態に対応できるよう意識付けを図る。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ○各係によるスクールカウンセラーとの調整、必要な生徒・担任・学年との連携が充実しており生徒の心の健康に対して効果的な活動が行われた。 ○係による効果的な活動により生徒・職員の防災意識を高めることができた。 ○選定療養費について、奨学会に補助制度を設けていただき、緊急時に躊躇なく迅速に必要な医療につなげられる状態が整った。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
情報	校内ICT環境の改善・整備を適切に行う。	○GIGAスクール構想・DXハイスクール事業に基づき、引き続き適切な教育が進められるようICT機器の更新や整備をおこない活用方法について研究をすすめる。 ○生徒「情報委員会」の活動のあり方について特別活動部とともに助言をおこない、ICT環境の適切な使用に生徒が積極的に関わられるよう支援をする。	A	A ○本年度文科省DXハイスクール事業では、IT企業訪問(東京)・生徒海外派遣等の生徒活動への支援や校内無線LANアクセスポイント増設・電子黒板・プリンタ・書画カメラ等の設備充実をおこなった。これらの十分な活用を通して文理横断的・探究的な学習支援を発展させる。 ○校内のICT機器については、新規配置・修繕・遠隔授業などに対応した。 ○生徒情報委員会へのICTの適切利用促進の支援。 ○学校ホームページはアップデートが頻繁となり活性化している。レイアウトの変更作業は安定的運用を優先させつつ見やすいサイトにするため継続して改善を進める。 ○校内LANサーバー(オンプレミス)の更新を完了し、校務用PC順次更新、遠隔授業用PCの整備を計画的に進めている。 ○引き続き生徒持ち込みBYOD端末の適切運用のため、必要な支援を継続する。 ○国・県等からの情報セキュリティ関連の伝達に留意し、個人情報管理、ウイルス対策等について継続的啓蒙、情報提供をおこなう。 ○学校評価質問内容を改善し、学校運営に生かすことができた。個別の意見にも早期に対応できるようアンケート実施時期について検討する。 ○アンケート回収率の向上。
	学校情報発信の充実を図る。	○生徒「情報委員会」の活動内容を、適切な情報発信をできるよう支援する。 ○学校ホームページのレイアウト等をより見やすくするとともに、著作権・個人情報等の法令遵守をふまえたうえで内容の充実を図る。	A	
	教育の情報化へ向けた支援活動を行う。	○教員の教育面・校務面でのDX化を着実に進められるようにハードウェアやソフトウェア・サービスの両側面から支援する。 ○生徒持ち込みBYOD端末やGIGAスクール構想1人1台端末の積極的な利活用に資するため、他分掌・学年との連携を強化し、可能な支援を引き続き進める。 ○情報セキュリティについて、生徒や教員に対して個人情報の厳重な管理やウイルス対策等について、注意喚起・情報提供をおこなう。	A	
	効果的な学校評価アンケートを実施する。	○学校評価の質問項目を継続検討し、より学校運営に生かせるような形を目指す。 ○保護者からの回収率を上げる方策を実施する。	B	
図書	生徒の課題発見と、探究活動を支援する学校図書館の充実を目指す。	○図書管理・検索システムのアップデート情報に留意し必要な場合は適用を検討する。 ○教科からの授業内容に関連する推薦図書情報を得て、レファレンス・展示等をおこない、貸出し利用に繋げる。 ○選書について、多様な興味関心をもつ生徒にできるだけ沿う選書をしてゆく。 ○総合的な探究(総合)の時間での利用をはじめ、生徒一人ひとりの学習で一層の図書館利用が進むように館内展示の工夫だけでなく、授業内での支援を推進する	A	A ○情報が古くなったり利用がない資料・書籍の整理と除籍を引き続き実施する。 ○学校行事、チャレンジプロジェクト関係の書籍・資料の各年次フロアでの展示・案内を続ける。 ○教科からの情報提供、SLA・学校図書館協議会の情報などを参考にバランスのよい選書を進める。 ○授業での図書館利用は増えている。また引き続き総合的な探究(学習)の時間関連のレファレンス支援を生徒・教員に対して行う。 ○図書管理・検索システムの更新情報に留意し、必要に応じて適用を検討する。 ○授業内容に関して教科との連携を強め、関連図書・資料のレファレンスに繋がるよう配慮する。 ○生徒の店頭選書を継続し、生徒の興味や関心にも配慮した選書をおこなう。 ○書架の増設、改廃をおこない、閲覧室椅子・書架等の更新を実施した。引き続き館内環境の整備につとめる。 ○生徒委員会内に、広報班、編集班、企画班を設定し、図書館マスコット制定、機関誌発行、作家インタビュー、ビブリオバトルなどの活動を積極的におこなうことができた。次年度はより計画的に進めたい。 ○委員会所属生徒へ日常のカウンター当番の仕事が基本であることを自覚させ、他生徒の図書館利用を促進させる委員会となるよう支援する。 ○図書館報2誌(「図書」「本のさきやき」)については中高生ともに関わり、委員会活動が活発化した。 ○年報の編集を引き続きおこない、発行を進める。
	読書に親しむ生徒を増やすため、読書体験の機会を設け動機付けをはかる。	○図書管理・検索システムのアップデート情報に留意し必要な場合は適用を検討する。 ○教科からの授業内容に関連する推薦図書情報を得て、レファレンス・展示等をおこない、貸出し利用に繋げる。 ○選書については、生徒の多様な興味関心に沿うよう生徒の店頭選書を含め実施する。 ○総合的な探究(総合)の時間での利用をはじめ、生徒一人ひとりの学習でさらに図書館利用が進むように館内展示の工夫や授業内での支援を進める。	A	
	生徒の学校図書館利用機会を増やすため、図書委員会の活動支援を実施し充実させる。	○日々のカウンター当番等を活動の基盤としながら、学苑祭・イベント運営、機関誌編集などに主体的に取り組める生徒の育成を支援する。 ○イベントの進行や広報にICT機器を積極的に活用する。	A	
	機関誌の編集・発行を進め、生徒については情報の送り手としての体験を支援する。	○図書館報2誌の制作について、中高生徒を編集に参画させ計画的に発行する。 ○年報の発行に向けて、編集方針検討や資料収集作業を着実に進行。	B	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
1 学年	基本的な生活習慣の確立を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○挨拶を中心とした、誠実な態度を身につけさせる。 ○自主的な時間管理を意識させ、時間の大切さを再認識させるとともに、時間厳守を心掛けさせる。 ○規範意識を醸成し、高めさせる。 ○環境整備・清掃活動の活性化を促す。 	B	<p>○時間管理や挨拶といった基本的な生活習慣の定着に注力した。次年度は、確立された生活基盤を土台に、学習や行事における質の高い活動を支援していく。また、慣れによる「中だるみ」が懸念される。特に集団における規範意識の維持や、教室環境の整備について、学年全体で一貫した指導を継続し、規律ある集団作りに取り組んでいきたい。</p> <p>○意欲的に取り組む姿勢が定着しつつある一方で、消極的な態度が目立つ生徒も一定数いることが課題である。次年度は、生徒が達成感を味わえるような指導や、興味・関心を引き出す工夫を継続する。学年全体で、個々の状況に応じたきめ細やかな支援をしていく。</p> <p>○生徒たちは行事や部活動を介して自然な交流を深めており、学年としての一体感が醸成されつつある。次年度は、この良好な関係性を基盤とし、生徒の自主性を尊重しながらも、互いに切磋琢磨し高め合える集団への昇華を目指し、働きかけを強めていきたい。</p>
	基礎基本を徹底し、自主自律的学習習慣の養成を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○予習、授業、復習の学習サイクルを徹底させる。また、家庭学習時間を確保させる。 ○生徒の知的な好奇心を大切にし、適切な進路情報を提供することで、進路希望・適性に沿った文理選択を促す。 	B	
	特別活動への積極的参加を促し、互いに高め合いながら主体的に行動できる集団の育成を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○部活動や委員会、学校行事やボランティア活動への参加を通して、他者との自発的な交流を図る。周囲への敬意や感謝の気持ちをもって生活できるようにしていく。 ○内進生と高入生の積極的な交流の場を設け、互いに認め、共に助け合い、高めあう集団の形成を目指す。 	B	
2 学年	基本的な生活習慣の確立、学習活動と部活動・委員会との両立を図る。規範意識と自主自律の精神の高揚を図り、リーダーとしての資質を涵養する。	<ul style="list-style-type: none"> ○日常の挨拶を定着させるとともに、5分前行動など、時間の管理を徹底させる。 ○規範意識を高め、場に応じた行動をとれるようにする。環境整備・清掃活動の活性化を促す。 ○SNSやICT機器との向き合い方を身につけさせる。 ○学校行事や部活動・委員会活動を通して、学校の中核を担うという意識を育てる。 ○周囲に配慮しつつ、自分の置かれた立場だからこそできることを実践させる。 	B	<p>○昨年度、教室に駆け込んでいた生徒が、昨年よりは早い時間に登校するようになるなど、少しずつではあるが、本校生としての自覚をもった学校生活をおくれるようになっている。今後も指導・支援・助言を続けていきたい。</p> <p>○いわゆる「中だるみ」が見られた時期もあったが、学期がすすむにつれ、学習への意欲を強く持った生徒が多くみられるようになった。一方で、まだ学習に対する取り組みが不十分な生徒もいるので、声掛けなどを続けていきたい。</p> <p>○部活動や委員会活動に積極的に取り組む姿が見られ、その際に内進生と高入生が協力して活動することが日常的になっている。すべての生徒が、それぞれの役割を果たしながら、充実した学校生活をおくれるように支援を続けたい。</p>
	基礎基本を徹底し、確固たる学力の土台をつくる。将来の進路に対する意識を高め、目標を定め、実現するためのプラン作りを促す。	<ul style="list-style-type: none"> ○学校の授業を中心に、「予習」「授業」「復習」のサイクルを確立させる。 ○授業公開や情報交換を積極的に行い、授業の質を高めていくなかで、生徒の学習意欲の向上につなげる。 ○生徒の知的な好奇心を涵養するとともに、学校内外のワークショップへの積極的参加を奨励する。 ○適切な進路情報を提供することで、進路希望・適性に沿った進路選択を促す。 	B	
	自己理解を深め、自分自身を大切にすることが育てる。他者との交流のなかで、一人ひとりが高め合える集団をめざす。	<ul style="list-style-type: none"> ○部活動や委員会、学校行事やボランティア活動への参加を通して、他者との自発的な交流を図る。 ○周囲への敬意や感謝の気持ちをもって生活できるようにしていく。 ○自分の置かれた立場で、小さな課題を解決していくことで、自己有用感を獲得させる。 ○内進生と高入生の積極的な交流の場を設け、互いに認め、共に助け合い、高めあう集団の形成を目指す。 	A	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
3 学 年	<p>社会人として不可欠な基本的な生活習慣を確立させる。高い規範意識をもって行動することを求めていることで、生徒それぞれが場に合った適切な判断ができるように支援する。</p>	<p>○日常の挨拶を定着させるとともに、5分前行動など、時間の管理を徹底させる。 ○規範意識を高め、生徒の自覚を喚起するよう声掛けなどを継続する。 ○周囲に配慮しつつ、自分の置かれた立場だからこそできることを実践させる。 ○教室の環境整備・学校の清掃を徹底し、学習しやすい環境を作る。 ○SNSやICT機器との向き合い方を身につけさせる。</p>	B	<p>○生徒一人ひとりの努力に加え、級友同士の助け合いや教職員の継続的な支援により、在籍者全員が無事に卒業を迎えることができたことは、大きな成果である。これまでの教育活動に関わってくださったすべての方々に、心より感謝したい。 ○日頃から周囲への敬意をもって生活することの大切さを指導してきた結果、多くの生徒が最高学年としての自覚をもち、規律ある学校生活を送ることができた。一方で、受験期など精神的負担が大きくなる時期には、軽率な発言や行動が見られる場面もあり、課題として受け止めている。今後は、生徒の心情に寄り添った指導や支援体制の一層の充実を図り、生徒のさらなる成長を支えていきたい。</p>
	<p>高い進路目標を掲げ、その実現に向けて最後までやり抜く胆力を養う。難関大学や医学部医学科をはじめ、生徒自らが設定した第一志望への進学実現を支援する。</p>	<p>○適切な進路情報を提供することで、明確な進路目標を設定できるよう支援を行う。 ○授業を中心とした主体的かつ計画的な学習を促進する。添削や質問の受付など、個別の学習を支援する。 ○生徒の学習状況・成績状況をスタッフ間で共有し、声掛けなど生徒を全体で支援できる体制を整備する。 ○過去問演習の促進、教科間連動の教材研究に努める。 ○調査作問(教授内容)と評価との明示的なつながりを持つ。</p>	A	<p>○個別面談を継続的に実施し、生徒一人ひとりの状況に応じた進路支援を行ってきた。また、学年会において生徒情報を共有することで、声掛けや助言など、教職員が組織的に生徒に関わる体制を構築することができた。 ○進路支援部と連携しながら、模擬試験の円滑な運営や進路情報の定期的な提供を行った。大学入試共通テストの難易度が上がる中、当初の志望校の見直しを迫られる生徒も多く見られたが、面談や日常的な声掛けを重ねることで、生徒が納得した進路選択ができるよう支援してきた。今後も、生徒の不安や葛藤に寄り添った支援を継続していきたい。 ○授業においては、内容や展開の改善を継続し、学習意欲を高める付加価値のある授業づくりに努めてきた。今後は、受験期における生徒支援について、学びの場が多様化する中で学校の役割を改めて検討していく必要がある。 ○生徒の答案作成力、特に記述力の向上を図るため、定期考査や校内模試における作問の工夫について、引き続き研究を継続する。</p>
	<p>自己理解を深め、自分自身を大切にすることが育てるとともに、他者との交流のなかで、一人ひとりが高め合える集団に成長することをめざす。</p>	<p>○部活動や委員会、学校行事やボランティア活動への参加を通して、他者との自発的な交流を図る。 ○周囲への敬意や感謝の気持ちをもって生活できるようにしていく。 ○自分の置かれた立場で、小さな課題を解決していくことで、自己有用感を高めさせる。</p>	A	<p>○学校行事においては、生徒実行委員が中心となって主体的に活動できるよう支援を行った。特に、級友や周囲の人々、さらには地域社会への敬意をもって行事に臨むことの重要性を繰り返し指導してきた。その結果、実行委員はリーダーシップを発揮し、各行事を円滑に運営するとともに、自分たちの代ならではの取組や成果を「遺産」として後輩に引き継ぐことができた。 ○7月までは模擬試験等の実施回数を精選し、部活動に集中して取り組める環境づくりに配慮した。多くの生徒が、部活動引退後に気持ちを学習へと切り替え、安定した学校生活を送ることができたと捉えている。</p>

※評価基準 A:十分達成できている B:達成できている C:概ね達成できている D:不十分である E:できていない